

ひかりのこ

光の子



No.210 2023.7.1

●年間聖句 わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。
(ローマの信徒への手紙 8 章25節)



「雨上がりの楽しみ」

表紙絵・中島 由起子

桃さくら

奥名 春江

(「春野」主宰)

薄氷^{うすこ}のうつらうつらと溶けゆけり

さくら餅たひらげて反体制派

娘との距離息子との距離山ざくら

桃さくらわたくしは只眠いだけ

老いぼれの猫も爪磨ぐ荷風の忌

目刺し焼く怒りはやがて活力に

雄叫びは女もすなり風光る

こどもたちと礼拝を守る意味

光の子どもの家 副施設長 穴水 祐介

今年度、光の子どもの家の年間聖句は「わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」（新約聖書 ローマの信徒への手紙8章25節）を選ばせていただきました。

光の子どもの家創設から38年が経過し様々などころで曲がり角にあります。特に運営の礎でもある信仰や祈りにおいて将来における光の子どもの家のありかたが問われ、信仰が試される大きな分岐点となっています。

光の子どもの家の事業計画の先頭には「祈り」という項目があります。その総論に「光の子どもの家は、何もない所から祈りによって建てられ、現在まで祈りによって守られてきた。イエス・キリストの生き方と聖書が語ることばが光の子どもの家の働きの土台である。生かされていることの喜びと日々必要な糧を

与えられていることはあたり前ではないこと。すべてのことに感謝できるように日常生活を子どもたちと共に生きること、実感できる生活を目指す。」とあります。そのために毎週日曜日の日本キリスト教団東大宮教会の教会学校、金曜日の夕礼拝を続けてきました。

クリスマスチャンとして礼拝の責任を担う立場から「光の子どもの家は、礼拝を大切にすることは当たり前」という考えが心の奥に少なからずあり、こどもたちや職員たちから「礼拝はめんどくさい」、「憲法でも信仰の自由は認められている」、「私たちが洗脳している」という声は届いていました。が、「みんなの知らない人たちが祈りや献金によって支えてくれているんだ」、「神様がみんなのことを必ず守っているから」、「信仰を強制しているわけではない」と伝えてきました。礼拝

に對するネガティブな意見を耳にする度に今のままでいいけないと思いつつも礼拝を守り続けることが大切と考え頑なに努めていました。特に年長児たちからすると「無理矢理出されている礼拝」になっていたような気がします。

それがこどもたちの礼拝時の落ち着きのなさに表れたりとひどい態度の時もあり、夕礼拝の奉仕をお願いしている牧師や教会学校教師から「本当にこどもたちに伝わっているのか」「どうしたら耳を傾けてくれるのか」という相談がありました。

それぞれの思いを語り合う場を作らねばならないと考え、今年1月に教会学校教師、夕礼拝の奉仕をお願いしている牧師、理事長、施設長、クリスマスチャン職員と未信者の職員数名とで「光の子どもの家の礼拝を考える座談会」を行いました。それぞれの立場から貴重な意見が出されました。

その中で確認できたのが、こどもたちにとってわかりやすく、楽しみのある礼拝。み

ことばを語る者と聞くこどもと職員たちが親しくなり、距離を縮める努力をすることを確認することができました。

竹花施設長からは、「光の子どもの家にとって変えなければいけないものと変えてはいけないうものがある。変えてはいけないうものの中に光の子どもの家の土台は、聖書であり、目には見えない神様を信じ礼拝を大切する」と話がありました。

私自身もこの話し合いの場を受けて頑なな考えを改め、もつとへりくだってこどもたちに寄り添った礼拝をしなればならないと思い直しました。

また、この座談会で話されたことを受け、クリスマスチャン職員でこどもたちが主体的に礼拝に参加できるように何をすべきかを考えました。それは、みんな神様から愛されている存在であること。そして自分を大切にして生きていてほしいと考え「君は、愛されるために生まれた」をテーマとし今年一年をかけて伝えていくことにしました。それは礼拝奉仕の伝道者の



3月26日、春日部ヒロファームでイチゴ狩り。いろいろな品種の食べ比べをしました。笑顔プラス子ども支援協会のご招待です。写真はサンドバッグ……ではなく、写真撮影用の巨大いちごです。

方々とも共有してこどもたち
にみことばを伝えていくこと
を確認しました。また、地域
教会の奉仕者には、礼拝のあ
とは、夕食を共にすること
こどもたちも楽しみな交わり
の時間となっています。
様々な時代の変化のなか
で、キリスト教を創設の精神
として運営をしてきた多くの
児童養護施設がこどもと共に
守る礼拝をあきらめてしまし
た。
「宗教」というデリケート
な問題ではありますが、「祈
り」によって始まった光の子
どもの家は、目にはみえない
神の祝福を待ち望み、生活を
共にする者たちの意見を真摯
に聞きつつ喜びや平安のある
礼拝を守り続けていく努力を
していきます。

そのことで日々の生活が平
安であり、施設を卒園した後
も孤独や絶望に襲われたり、
様々な試練に立ち向かわなけ
ればならない時があっても礼
拝の中で歌った讃美の歌詞や
メロディー、そして聖書のこ
とばが心のどこかに残ってい
ることで生きることをあきら
めないでいてほしい。どんな
形でもいいので祈ることであ
けを求めることができるよう
になつてほしい。そんな心を
時間をかけて培っていきたく
と願っています。
そしてこの光の子どもの家
が、ここで暮らした者たちの
いつでも戻ってくることで
きる心の港としてあり続ける
ことができるように努めてま
いります。

なぜコロナは蔓延したのか？

——いま私たちが学ぶべきことについて——〈後半〉

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

前号からの続きの話であ
る。コロナの蔓延の機序につ
いて考察する論文の具体的内
容を解説することから始め
る。

などのコウモリとは異なり、
花の蜜など植物をその食性と
しており、この点がこのスト
ーリーの重要なポイントであ
る。

ヘンドラウイルスという耳
慣れないウイルスであるが、
1994年、オーストラリア
のヘンドラ村で、2頭のウマ
が死に、その死体解剖に関わ
ったヒトも亡くなったことを
きっかけにして研究が始めら
れ、オオコウモリを自然宿主
とするヘンドラウイルスが病
原体として同定され、このウ
イルスがウマを中間宿主とし
て、ヒトに感染したことが明
らかにされた。今回の研究
は、このウイルスのオオコウ
モリからウマへの感染に焦点
を当て、その感染に周囲の環
境がどのような影響を与える
のかを、25年間に渡って調べ
ている。ちなみに、話に出て
くるオオコウモリは、昆虫な
どを主な食べ物にする我が国

ヘンドラウイルスは、オー
ストラルリアにヨーロッパ人
が入って来た1700年代以前
から、オオコウモリの体の中
で増殖し続けていたと考えら
れるが、前述の1994年の
ウマ、ヒトへの感染以前に
は、ウマ、ヒトへの致死性感
染は認められていなかった。
このように、近年になつては
じめてヒトに感染が認められ
るようになった感染症を新興
感染症と呼び、コロナは最も
新しい新興感染症ということ
になる。
ウマのヘンドラウイルス感
染症は、その後2006年以
降増加し始めるが、環境変化
の感染症発生に対する影響に
ついての詳細な検討の結果、
以下のようなストーリーが示

されている。

(1) 市街地や農地を作る目的で森の樹木の伐採が進み、ウイルスの自然宿主であるコウモリは花蜜などの森の中の食べ物を見失うことになる。

(2) エルニーニョ現象に伴って樹木の開花が起こらないことなどもあり、食べ物はさらに少なくなり、コウモリのねぐらは、森から市街地や農地に近い場所に移動する。

(3) 食べ物の不足に伴う栄養ストレスがコウモリに加わり、ウイルス排出を増加させる。

(4) 農地にねぐらを作ったコウモリの排出したヘンドラウイルスはウマに感染し、さらにヒトへと伝搬される。

豊かな冬期間における樹木の開花がある年は、ウイルスの蔓延は起こらないという科学的な証拠に基づいて、この研究者たちは、「豊かな森における冬期開花の回復を目指すプログラムがウイルスの蔓延を防止するだろう」と提唱している。この研究は、人間による環境破壊が感染症の蔓延に重大な影響を及ぼすことを実証した、貴重は研究である。

と考えられるが、私たちは、その示すところを心の底にしっかりと刻まなければならない。

気候変動を介した地球環境の悪化を阻止するための活動が、SDGsをはじめとして、世界的に目白押しである。大事な活動ではあるが、一つの問題点は、あくまでも人間にとっての利は何かというポイントに直截的に焦点が当てられすぎていることではないかと思う。ヘンドラウイルスの話待つまでもなく、人間の行動によって引き起こされた自然破壊は、人間以外の生物種の生態の変化を始めとするあらゆる地球環境に大きな影響を与え、その一つの帰結として人間の生活をもかく乱しているのである。この全体のプロセスを思考過程の中に含んでいない環境に関する立論は、「人間中心主義」的であり、大自然の中における小さな、小さな存在として人間を位置づけなければならないことを忘れていない。

今回のコロナウイルスの世界的な蔓延から学ばなければならないものは、それが人間

社会にいかにより大きな影響をもたらしたかについて検索を進めるだけでは見えてこないように思う。ウイルスの保有宿主と考えられるコウモリの生

キジ

彫刻家 中島 睦雄

4月半ば、このところ朝になるとキジが来ている。

家の裏の藪で鳴き声が聞こえ始めると間もなく庭にやって来て「ケツケツ」と鳴くのである。以前は「つがい」でやってきたものだが、最近雄だけでやって来る。庭の低草の生い茂った広い場所ですつとしていることが多い。

そんな様子をカメラに収めてみるのだが、写った画像にはポツンと小さく写っているという具合である。静止を捉えるのが容易ではなく、気づかれてサッと竹林の方に逃げられてしまうのである。そしてまた「ケツケツ」と鳴くのである。

私は写真の出来具合が少々不満で、カメラ屋さんにて望

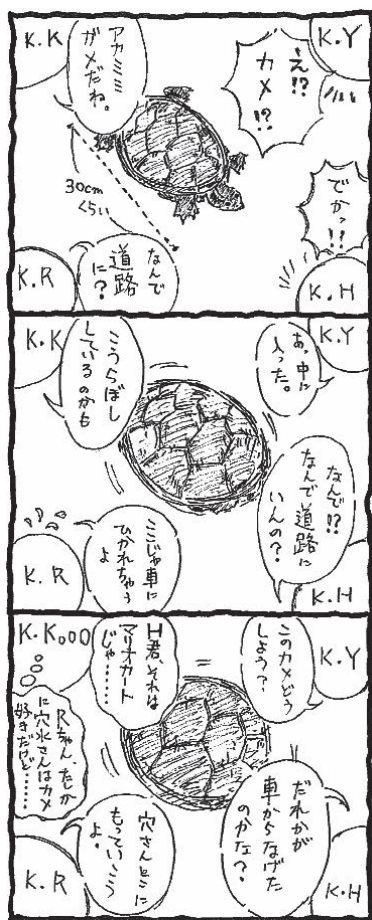
態に対する、人間が引き起こした環境変容の影響から説き起こしていく病因論が望まれる所以である。

遠レンズを購入し、今度はいつでもある程度大きく撮ろうと屋内窓際にてカメラを構えているのだが、なかなかシャッターチャンスには恵まれない。キジはこちらの様子を見ているのだろうか。

野生の生き物は警戒心が強く、人間のちよつとした動きを感じ取りすぐに逃げてしまう。キジにとっても同様で人の存在は決して嬉しいものではないだろう。人間は様々な生き物を捕食してきたり、それだけでは留まらないような行為もしてきている。キジもその範疇だったことから本能的にも警戒しているのだろうか。

しかし私としては、そのキジを苦しめたりしようという

$K \times 4$ が K に遭遇



つもりは決してない。一個人として親しみを持っているのである。その上で雄キジの美しい姿をカメラに収め、楽しみたいだけなのである。

しかし待てよ。こんな調子の良いことを言っている私も改めてみるとキジに対して申しわけないことをしていたことがある。

大分以前のことだが、知り合いの人から雄のキジを頂いたことがある。剥製である。それを応接間のお客様の目に付きやすい所に飾っているのである。

そう考えると、キジは我が家の庭にただ遊びに来ていただけではないのかもしれない。

5月に入るとキジはパタリと来なくなってしまった。生

態の都合によるものであろうか。そう思いたいものである。それにしてもあの美しいキジが見られなくなったことは残念である。

プリズム

家をたたむ（竹花家）

児童指導員 佐藤 義岳

年度末で竹花家を閉じるこ
とになった。竹花家の子ども
4名のうち、2名が年度末
に退所（高校卒業、家庭復
帰）。担当していた田口も退
職。一方で新しい物件を借り
て男子グループホーム（東仙
道家）が開設され、竹花家を
継続する職員体制を組むこと
ができなかった。

家やグループの変更、職員

の異動・退職など、子どもたちにも伝えるのは高校の合格発表が済んでからだ。「受験生が動揺しないように」という配慮からで、他に適当なタイミングも思いつかないが、果たして3月頭に発表、春休みに入った途端に引越しいいう急展開が最善なのか、毎年迷う。

日向と千暁は、光の子ども
の家に來てからずっと竹花家
にいた。「うちら今までずっと
一緒だよね」、「彩と樹里ち
ゃんがいなくなったら、次は
誰が來るのかな?」、「ずっと
竹花家にいて、今から本園で
は暮らせないよね」などと話
していた。

二人にはそれぞれ別の家に
移ってもらうことになった。
当然「どうして」と思われる
だろうし、實際言われもし
た。これからも聞かれるだろ
う。「子どもと職員と家の組
み合わせを職員みんなで考
えて、その中でいちばんいい
形がこれだった」と答えるし
かない。

竹花家がなくなることにつ
いて、単に「家替え」、また
は「竹花家の倉澤家への統

合」などと言われることもあるのだが、私の実感は「竹花家の解散」だ。倉澤家は倉澤家であつて、竹花家の替わりにはなれない。

子どもほどではないが、私も5年半過ごした家から出るのは寂しい。

家をたたむのは分かっていたが、年末に表札をかけかえた。元の表札はテープが剥がれて落ちてしまった。新しいテープで貼り直す前に積年の汚れを落とそうとこすってみたら、木に雨水がしみこんで腐っており、浮き彫りの字が崩れてしまった。ホームセンターで板を買い、日向に新しい表札を書いてもらった。

3月はしみりしていられるような月ではなかった。卒業式、通院、引越し準備、外出、関係機関との協議、毎日やることが詰まっていた。彩が親元に帰る前に花見をしよう、青毛堀川へ河津桜を見に行つた。樹里の送別会で焼肉に行つたのに、当人は食べるより周りに気を遣つてばかりだった。

タオルを買つて近くのお宅へご挨拶にまわつた。彩がお

もしろがつてついできた。駐車場を解約した。田んぼの縁に駐められると石が入るし、うちの土地を貸そうか？と声をかけていただいた場所だった。

施設開設から勤めてきた職員の中には、いよいよ定年が近づいてきた者もいる。光の子どもの家として、職員の定年退職も、年度当初から次年度の編成替えが子どもに分かっている状況も初めてだ。倉澤家も子どもも5名のうち2名が退所する見通しである。今年度の暮らしをつくりながら、次の場所、体制にどう移行していくか、考え続ける1年になる。少しでも良い形を作っていくたい。

静かな仙道家

保育士 遠藤 恵里香

今年度、佐藤家から仙道家に引っ越してきました。仙道家の個性豊かな4人の男の子たちに凛、菜々、ほのか、ときどき自立訓練中の楓を加え、計8人の子どもたちとともに新仙道家での生活が始まっています。前年度の佐藤家

での生活は幼児が多く、とにかくてんやわんやといった毎日を送っていました。新仙道家には幼児が居らず、夕食後の時間は特に静かすぎて私たち引っ越してきた組は「仙道家めっちゃ静かなんだけど。」と驚きをあらわにしていました。

特に菜々は、前年度から大きい音が苦手であったり、眠りの浅さを訴えていましたが、奥寺さんに「夕食後は静かに過ごした方が眠りの質が良くなるよ。」と教えられると、「だからかなー。最近はや起きたりしないですぐすり寝れる。」と話していて、この静けさが菜々にとって良いものになっているようです。（当の私は、この静けさが物足りなくて、ちよくちよく佐藤家の幼児たちに会いに行っています。笑）

仙道家の子どもたちは一見落ち着いて過ごしているように見えますが、新体制での生活、新学年での生活に適応しようと頑張りすぎている面もあると思います。ひとりひとりの生活に目を配り、仙道家が安心して過ごせる場となる

よう環境づくりをしていききたいと思います。

原田家から

児童指導員 黒川 健一郎

今年度から原田家に配属になった。まず始まったことは中学1年生になった花梨の送迎だ。少し離れた学校に通うため、スクールバスの停留所まで車で送ることになった。

花梨は頑張り屋の面も多々あるが、環境の変化や対人関係等に非常に弱く、野良猫の警戒モードのような目つき、体勢になったり、小刻みに足を動かしてあちらこちらへ体の向きを変えたりすることがある。

そんな花梨が、気の知れた友人もいない新しい場所に通うというのは、本当に大変なことだと思う。下校後の花梨に話を聞いてみた。

「学校はどう？友達できた？」
「うん、学校は楽しいよ。友達もできた。○○ちゃん」
少し複雑な表情。

「なんか嫌なことはない？」
「うん、バスの中が嫌」
苦笑い混じりの口調だった

今までも持ち前の頑張りでこなしてきた花梨なら……という思いで聞いていた。

しかしながら後日、彼女の表現に対して、こちらの捉え方が違っていたなと感じさせられるできごとがあった。

朝、車に乗せるため花梨を呼びに行くと、ダイニングで寝そべって手足をばたつかせ泣きじゃくり「嫌だ!!嫌だ!!」と叫んでいた。なかなか話にならないため何が嫌なのか解ることもできなかった。そこで「そんなに嫌なら無理して行かなくともいいんじゃない」と伝えた。その日は学校を休んだ。

別の日にも同様の表現があった。「今日も休む？」と聞いても「嫌だ!!」

落ち着きを取り始めた頃を見計らい聞いてみた。

「何が嫌なのか言ってくれないと……」

「……バスが嫌だ」

「学校は嫌じゃないの？」

「うん……」

「学校には行きたい？」

「うん……」

あの時は苦笑いしながら言っていたが、こんなに抵抗す



5月3日、加須市民平和祭り
相撲大会に出た子の応援



6月、田んぼで生き物探し

るまで嫌なことだったのか。はたまた担当の岩崎が傍にいてくれるからこそ出せる甘えの表現なのか……。ともあれ、学校に行きたいのに登校のバスが辛くて通えないのでは、非常にもつたないと思

った。関係する職員で対応を話し合った。本人からも車で送って欲しいと言葉が出た。金曜日はバス登校、それ以外はこちらの車で学校まで送迎することとなった。『金曜日がんばれば休みだから』と励ましやすくだろうこと、自身でもそう思えるようになってくれればということ、バスに慣れ

てくれれば回数を少しずつ増やして……という感じで試みる

ることになった。それから、あの時のような激しい登校渋りは今のところ出ていない。送迎の車内では、もうすぐある運動会やその練習のこと、友達のこと等を話してくれたりもする。

色々な道を走ってみたり、バスを追跡してみたり、バスより先に着こうかとしてみたりもして道中を楽しんだ。

そんなこんなだが学校に通えることは良かったと思つた。金曜日のバス登校も何とかがんばっている……と思つていたが、1ヶ月もしないうちに、金曜日に渋りが出てきた。彼女に取っては『がんば

れば次の日は休み』の金曜日にすることはまだ難しいのだろう。ただ、学校に行きたい気持ちには変わらないうるようだ。もしかしたらそれすら頑張つて無理をしているところもあるかもしれないがそこは支えていけたらと思つた。

というわけで私は金曜日もハンドルを握る決意を固めなくてはならないようだ。

少しづつ(原田家)

主任保育士 岩崎 まり子

田んぼに囲まれた光の子どもの家は、小さな稲が植えられ、水が張られたこの時期、いづどこから見ても美しく映えます。

新しい年度が始まりました。今年度は、10年以上やつてくれていた職員が複数名辞めてしまったこともあり、大きな移動と心の揺れからのスタートでした。

原田家も岩瀬の退職に伴い、メンバーを変更して私が引き継ぐことになりました。ずっと岩瀬に担当してもらっていた子どもたちばかりだったので、そのショックは私

の想像や身構え以上だったと思います。皆、よく耐えてくれているなと思つています。

まだ夜になると赤ちゃん言葉になつてしまう中学生になった花梨は、新しい学校生活に馴染めず職員に送迎してもらつていますし、武士は週1くらいの割合で岩瀬に電話をかけ、1時間くらい話をしています。毎夜、中高生たちは穴水に愚痴を聞いてもらっていますし、一緒にゲームやサイクリングをしてくれる職員もいます。

私だけでは何とも出来なくても、心が弱っているのではないかな、と思い巡らせてくれる大人たちに囲まれ、たくさんフォローしてもらいながら、子どもたちと少しづつ前に進んでいけそうな気持ちでいます。

去年より少し似合わなくなつたランドセルを背負つて登校する新6年生を先頭にした小学生の登校班を見送り、車が見えなくなるまで花梨ちゃんを見送ります。心の中で「頑張つて」とエールを送りながら……

日誌抄

2023年3月～4月

【5月1日の在籍児童数】

幼児 4名 小学生 12名
中学生 6名 高校生 9名
その他 1名 計 32名

【3月】

3日 埼玉県立高合格発表
2名とも合格。
4日 東仙道家が山形へ。蒼士が就職に向けて自動車免許合宿中、その様子見も兼ねる。
6日 3月生まれの誕生会。
11日 出^{たび}発の会。
17日 高校を卒業した樹里が引越^し。
20日 職員3名の送別会。
25日 第130回理事会。
彩、家庭復帰。
26日 春日部ヒロファームでイチゴ狩り。笑顔プラス子ども支援協会のご招待。
27日 蒼士、運転免許取得。
31日 蒼士、就職先の社員寮へ。仙道家、東仙道家が権現堂でお花見。

【4月】

1日 佐藤家と倉澤家が権現堂でお花見。駐車場に入るまでが大変。
3日 進級進学祝いの会。
9日 イースター礼拝。3年振りに東大宮教会へ。
10日 各学校入学式。
17日 4月生まれの誕生会。

【礼拝ご奉仕各位】

東大宮教会教師、木田浩靖、木田智恵子、佐々木優、橋本従道

【委員会の主な動き】

運営 職員体制検討
危機管理 コロナ5類移行に合わせガイドライン改定
学習支援 今年度の平日宿題支援は各家で実施
環境整備 こいのぼり設置、藤棚の花が咲きました
食生活 こども祭りからお客様あり、食事ありのイベント再開！
研修 新任職員研修など検討
広報 「光の子」210号発行遅れる……。
情報・通信 子どものスマホ契約、業務用スマホ検討

【実習生】 十文字学園女子大学2名

【元職員の来訪】 牧野由紀子

【寄贈者各位】 青木正文 岩本光弘 大塚東一 坂田喜久江 鈴木梅野 鈴木康弘 関根佑介 仙道富士郎 内藤芳江 中島睦雄 中山久美子 原田清司 藤田幸子 村田裕介 谷口辰夫 吉羽良美 (株)イトアンドホールディングス 慈恵病院 しずくの会 すくすく広場 (株)Dasuka & desiree (株)ティ・エスロジステイクス (株)なとり (株)文学の森

【ボランティア各位】

〈華道〉岡本有代 〈施設補修〉栗橋宮繕 〈学習〉常松洋介 向井進 〈手芸〉山田智山田裕子 〈訪問美容・理容〉アンスリーム

その他、多くの皆様にお世話になりました。ありがとうございました。

近藤みちるさんの「共育ちカンガルー日記」は休載です。

ご寄付について（物品の寄贈は事前にお問い合わせください）

【郵便振替】00130-1-128022

他銀行から【銀行名】ゆうちょ銀行 【金融機関コード】9900 【店名】019店
【店番】019 【預金種目】当座 【口座番号】0128022

【発行】社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】〒349-1155 埼玉県加須市砂原277-3
【電話】0480-72-3883 【FAX】0480-72-6649 【メール】hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
【Webサイト】http://www.hikarinokodomonoie.com/ 【印刷】(株)エル・アートデザイン